

おじさんが立っている



近藤英子

駅と十八階建のビルを繋ぐ連絡橋におじさんがいつも立っている。五十代半ばの中背で痩せて、野球帽をかぶっている。雑誌を持った手を掲げて。

ビルにはマンションや商業施設が入っており、私は出かける度におじさんを横目でみながら通り過ぎていた。ある日、思いきって尋ねてみた。

「ちょっとみせてもらってもいいですか？」
「どうぞ、どうぞ」

おじさんは嬉しそうに差し出してくれた。手にとつてながめてみた。インタヴューあり、その時どきの社会問題をあつく語っていたり、この号ではアメリカの俳優が特集されていた。料理も載っていた。

「読みやすくしておもしろいですね！ 写真も豊富だし、ずっとみてみたかったです」

「そうでしょう。ここに立つようになって八年になるんです。色んな人から話をきかせてもらうのが楽しくて……」

おじさんはどこか悲しみを湛えた穏やかな表情で言った。それからよく立ち話をするようになった。

「暑いねえ、暑いとしか言いようがないわ」
おじさんは汗をふきふきうんざり顔で言う。

「真青な空を見上げると吸い込まれそうやね」
まずは天候の話から始まる。

「午前十時の映画祭」でみた『追憶』を話題に出すと、
「バーブラ・ストライサンド、歌うまいねえ、あの映画好きやった」

懐かしそうに声を弾ませた。

『砂の器』をみてきたときも、私が感動を抑えきれない勢いで話しかけると、

「松本清張の、あれいい映画や。深いわ、親子が放浪するシーンは涙、涙や」

と私の興奮を受け留めたあと、あとからあとから話が盛り上がった。

「常連さん、六十才の人なんやけど、二五才の女の子と結婚しはってね、二人共初婚ですわ」

会社勤めをしていたこともあるようだが、覚悟をもってひとりを生きているおじさんは、実に飄々として力が抜けている。家族を得た人の話をするときも淡々とした趣がある。

「へエー、よっぽどイケメンなんやろか」

私はおもしろがってきいてみた。

「すごい資産家らしいよ。それと八五才になる母親の面倒をみるのも条件とか」

いつの間にかさまざま内容のものをきかせてもらって、想像が膨らんでいったものだ。

五年も言葉を交わしていても、お互い名前も知らないし、どんな経歴の人が全く知らない。それでも、いつもの姿をみかけないときがたまにあると気がかりだ。不在というのは、妄想が妄想を呼び、強い不安に陥れる。『そこにいる』ことはとてつもなく大きい。

が驚くほどまざまざとよみがえり、立っていられないくらいに眩暈を覚えたかのようにだ。

雑誌を買う幾人かが続いたあと、じゃあ、と頭を傾げようとしたとき、

「僕ね、人を殺しそうになったことあるんですよ」

「えっ？ なんの話？」

聞き間違えたのかと、しばらく黙っておじさんの真顔を息を止めてじっと見た。次のことばを待った。

「仙台に住んでいたとき、妻に大量の睡眠薬のませたんです。ビールに入れて、五分も経たないうちに床にごろんと倒れて、僕はとっさに妻の口を手をつつこんで吐かせたんです」

私はどう何を言えはいいのか……喉がカラカラ、心臓がバクバクしていた。

おじさんは堰を切ったように語り始めた。

「妻に男がいてね、許せんかったんですわ。裏切られたことが憎くて憎くて。僕は真面目なサラリーマンでまっすぐ家に帰って、休みの日には子供たちとキャッチボールしたり、妻とも心が通い合ってるものと思ってたのに。あらゆる手を使って、どんな男か突きとめてね。妻がパートをしていたコンビニの店長とかなり長い間続いていたことがわかって。人間てこういうときすごいエネルギー湧いてくるもんです。妻を追い詰めていく自分をおかし

新型コロナウイルスの脅威が世界を、日本を急速に襲ってきた頃、橋の上を歩き交う人の数は日に日に絶えて、寒風が吹き荒ぶ中をおじさんはひとり佇んでいる。

「コロナたいへんやね。いつまで続くんやろね。マスクはね、お客さんからいたでくんで、家に六十枚ぐらいあるんですよ」

マスクが不足して、ひとつだけを大切に使っていた時期だったので、羨ましくきいたものだった。

二度目の緊急事態宣言が出て自粛が呼びかけられた。

「あちこちでものすごい増えてきてるね。なんでこんなことになったんやろ……」

おじさんがどうなるかと心配して、落ちつかないようすで呟いた。

「神の怒りだと思うよ」

日頃から社会に対してなぜ怒りの声をあげない!? と祈り叫んでいた私は不意をついてことばが出ていた。

そのとき、おじさんの顔がさっと変わった。みるみる歪んでいった。いきなり心の奥深くに抱えているものに突きささったかにみえた。いつもの欲のない、プライドを捨てた、何も持たないおじさんとは別人、私が見たことのない男が目の前にいた。長い間黒い塊から視線をそらし、暗闇に迷い混むこともなくなった、と思い込んでいた今、『過去』へぐいと連れ戻された。見苦しい愚かな救いようのない日々の情景

がってもいてね。ほんまにバカでした!!」

おじさんを見かけなくなってだいぶなるなあ。どうしてるかなあ。

あれからすぐおじさんは姿を消した。はじめは、私の一言でおじさんを立ち退かせてしまったのかと、ずい分悩んだ。

けれども今は言っただけでよかつたと思ふ。人間誰しも抱えている影や闇にほのかな光を照らすことは、解放されるためには必要なことだ。

それでもやっぱり淋しい。

あ、おじさんが立っている！

「久しぶり、お元気？」

振り返った人は、知らない男性だった。

*タイトルイラストは「白川静漢字暦2021」(平凡社)より